

### Ⅲ. 超音波内視鏡を用いた胆膵疾患の低侵襲治療

東京医科大学 消化器内科学分野 主任教授

糸井 隆夫

近年、超音波内視鏡(endoscopic ultrasonography: EUS)を用いた胆膵疾患の治療が世界中で急速に普及している。古くから行われ、現在胆膵疾患の診断・治療に欠かせない内視鏡的逆行性胆管膵管造影(endoscopic retrograde cholangiopancreatography: ERCP)は経乳頭的に胆管膵管にアプローチする方法に対して、EUSは経消化管(胃や十二指腸から)に消化管外の膵病変や胆道(胆管や胆嚢)にアプローチする新しい方法である。EUSガイド下治療として最も普及しているのが膵炎後の局所合併症としてしばしば見られる膵周囲液体貯留(仮性嚢胞、被包化壊死(Walled-off necrosis: WON))に対するドレナージである。特にWONの内部には大量の壊死物質があり、ドレナージに用いた瘻孔から内視鏡的に壊死物質を除去する内視鏡的ネクロセクトミーが極めて効果的であることが知られている。そのほかERCPによる選択的胆管膵管挿管が困難な症例に対して、EUSを用いた経消化管的ドレナージはランダム化試験からも経皮経肝胆道(胆管・胆嚢)ドレナージと変わらない成績が報告されており、新しい胆道膵管ドレナージ法としての地位を確立しつつある。さらに近年ではそうしたルートを利用して、胆管膵管そして胆嚢内の結石を除去することも可能であり更なる普及が期待されている。こうしたEUSガイド下の治療は専用の処置具の開発と合わせてさらにその適応が広がっている。当科では慶應大学との共同研究により世界で初めてEUSガイド下の胃空腸吻合術(EUS-guided double-balloon occluded gastrojejunostomy bypass: EPASS)を確立した。本講演ではこうしたEUSを用いた新しい低侵襲治療を動画と合わせて紹介する。